

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修5歳児・第2回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

日時：令和6年7月26日（金）15:00～17:00

会場：梅田地域学習センター

講師：帝京科学大学 非常勤講師 日色 智絵 氏



子どもたちの遊びの様子を撮影し、動画を基にグループワークをおこないました



パーティーごっこ

キラキラさせたい

パーティーは
音楽があるよ

「お化け屋敷
やりたい」
新たな声から
次の遊びへ

おばけやしきごっこ



段ボールで迷路作ろう

お化けは、怖がらせ
過ぎないようにしよう



女兒3人から「パーティーしたい」との声が上がる。どんなイメージをもっているのか対話を通して思いを聞いた後、衣装やお面作りをしてパーティーの始まり。保育者も一緒に衣装を作って遊びます。

「やりたい」と言った子が、自分から友達に思いを話して遊びが決まる。保育者に「何時から始める?」と聞かれ、始まりの時間を決めて準備を開始。お化けをやる子は自分なりのイメージをもち、そのイメージに合わせた表現を楽しんでいます。

ビデオを観たあと、自分がいいなと思った「子どもの姿」と「保育者の関わり」を付箋に記録し、グループワークで3つの視点を基に分類しました



- ①10の姿の視点 ②遊び込むために大切なこと
- ③今後、自分に置き換えた時の関わり方や環境の工夫



「終わりはどうしていたの?」



「どんな風に進めていったの?」

各グループから質問が出されました

質問事項
➡担任からの返答



子どもたちが話し合って決めるまでの積み重ねはどうやって進めていったの?
➡サークルタイムで進めていった。中には、今何をしているのか分からない子もいたので、マイクを作り、話す人が持つようにしていった。すると興味をもって話が聞けるようになったり、自分もマイクを持って話したいと意欲的になった。

遊びのイメージはどうやってもてるようにしていったの?
➡お化けのイメージはもっているが、迷路は分からない子が多かったので、画用紙に描いてイメージにつなげていった。またイメージから素材につなげていくやり取りもしている。



その日遊びの終わりは
どうやって決めているの?

➡始める時に時間を決めた。「まだ遊びたい」という時は話し合っ
てどうするのか決めている。



衣装やお面をなど作る時に、使いたい物や素材は自由に使えるの?それとも必要に応じて使えるの?

➡ある程度部屋の中に素材や教材は用意してあるが、子どものイメージによって必要なものがあれば一緒に用意します。また、道具の使い方は、遊びの中で子どもたちが経験することによって（長すぎた、使い過ぎた等）気づき、ルールができていく。



困りごとに寄り添う援助

★エピソード★

「パーティーだから音楽を掛けて踊る」というイメージをもつ男児。やってみるとエラー表示で機械が動かない・・・。
男児は「CD換えたら動くよ」と言ってCDを換えてみるが動かない。
保育者が他のクラスにもデッキがあることを話すと、3歳児クラスに借りに行く。自分で状況説明をして借りてくることができ、自分のイメージするパーティー遊びが続けられた。
その後、お化け屋敷遊びに変わっていくが、男児は「まだパーティーやりたい」と続ける。デッキが壊れて満足に踊れなかったという思いを担任は汲み取っていた。

子ども一人一人の困りごとへの寄り添い方は違う。
子どもの今を理解しての関わり、自分の力で乗り越えられるよう支える関わりがされている。



一人一人の思いやイメージに寄り添った関わり

同じお化け屋敷をしても「隠れる場所を作りたい」「段ボールをしっかりと立たせたい」「お化けらしい表現の仕方」等、一人一人のイメージや思いは違う。子どものイメージに添った動きで応え、表現の工夫を認める等、その子どものイメージや頑張っていることを捉えて、受け止める関わりがされている。



実現したいこと、表現したいことが叶う場作り

お化けになることが楽しい子、迷路を作ることが楽しい子、お化けを作ることが楽しい子など、一人一人の実現したいことや表現したいことが叶う場が構成されている。

目的を受け止め、共に遊び、楽しさに共感する

子どもの目的を感じ取り、共に踊ったり、一緒に作ったり保育者もお化けになったりしている。一緒にやってみないと気付けないこともある。共感子どもの信頼関係につながるが、保育者主導にはなっていない。

友達同士の交渉の仲立ちとなる

同じ場を使いたい、目的が違う子それぞれの気持ちを受け止め交渉の仲立ちをする。丁寧な関わりが大切である。

イメージを膨らませる援助

衣装を身に付けたり曲を掛けたりなどで雰囲気作りをする。

子どもの発想を引き出しながら 保育者もアイデアを出す

選択は子どもだが、これまでの経験では思いつかない場合、物や方法を提示する援助も必要である。

目的が実現するように材料や用具の使い方の援助

子どもが段ボールにガムテープを貼る姿を見守り、少し揺らしながら、しっかり貼れていることを認める言葉を掛けている。個人差に応じて援助できることは、時間がかかっても見守る関わりが大切。



安心・安全に遊べる動き

場の整理や使わない物が落ちていたら片付ける等、保育者の動きを見たり、保育者の呟きを聞いたりする（モデルとなる言動）ことで、安全への留意も主体的に行うように育つ。

保育者は5歳児にとって・・・

保育者の存在（身の置き方や行動、言葉、心情、態度等）が子どもの行動や心情に大きな影響を与えている。保育者は自分も幼児にとって、非常に重要な環境の一部となっていることを認識する必要がある。



- 子ども一人一人の興味、関心、欲求などの内面を理解して寄り添う存在
- 子どもが主体的に過ごせるように信頼関係を培い、拠り所となる存在
- 子どもたちにとって、遊びや生活のモデルとなる存在
- 一人一人の良さや可能性を見出し、その子らしさを損なわず、ありのままを受け入れる姿勢
- 表現の喜びが感じられるようにする工夫
- 遊び込めるように子どもの視点になって、体験を豊かにする環境の工夫
- 子どもの視点に立って人や物や出来事との出会いを広げ、豊かな関わりを工夫

研修生の報告書より

子どもが主体だが、保育者がアイデアを出すこともあり、これも大切なこと。子どもの思いばかりでは進まない時もある。子どもたちの心の動きを汲み取りながら保育者も援助し、思いが実現、満足できるようにしていきたいと感じた。

子どもたちのやりたい気持ちを尊重し、一緒に考える時間を設けるよう心掛けていった。考えが先に進まない時には決定したことではなく、考える材料の一つと捉えられるよう十分に気を付けていった。保育者が思いつかない発想やイメージが広がり、やりとりも活発に行われていた。自分で考えたことを実現できるかもという期待に満ちた表情をたくさん見ることができた。